



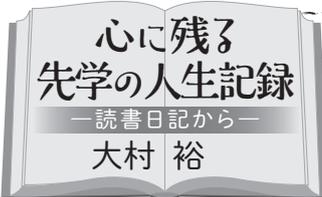
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.227  
2022.8.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第29回

## 在野研究者・井尻正二の勉強法と共同研究の極意

(『井尻正二選集3. 科学運動I 35年の歩み』大月書店 1982年より)

古生物学者・井尻正二(1913~1999)の著作集を取り上げるのは二度目である。今回は彼が実践した勉強法や共同研究の極意を標記文献から紹介してみたい。私と同じ境遇の在野研究者の参考になると思う(なお引用文は適宜改変・編集してある)。

まず勉強方法について、井尻は以下のようなアドバイスをしている(「IV 勉強の方法」)。

- イ) 理論は繰り返し体系的に読むことによってその著者の考え方・判断の仕方・見通しのたて方・実践の方法などになじみ、これを身につけることができる。読書によって私たちの脳の動きがその著者のようになる訓練をうけることになる(54頁)。
- ロ) 古典と交互して実践に直接関係がある現代の文献を読むこと(58頁)。
- ハ) 現代の雑誌類だけを無原則・無批判に読むことは絶対につづしむこと(58頁)。
- 二) 読まなくてもよいから積んでおくだけでもいいから関係書をあつめて本箱を飾る。現実の生活から浮き上がった「理想論」や「希望」にもとづくテーマを立ててはいけない。自分の才能や生活(環境・条件)とむすびついた、「何になら出来る」という、現実的なテーマを選ばなくてはならない(257・259頁)。
- ホ) 単行本でなくては先学の思想や学問の体系を学びとることが出来ない。論文から先学の深い学問的思想や方法を学ぶことは難しい。勉強の過程でメモノートをつくり、それを10年間蓄積してゆくこと(264頁)。
- ト) 自分の能力や環境や勉強(研究)の条件を十分に分析して、むだがなく効果のあるテーマを選ばなくてはならない(268頁)。(傍点は引用者。以下同様)

在野研究者は、生活のために他の職業に従事し、十分に研究の時間をとることは出来ない。家庭を持っている人ならば、日々の家事や育児等にも研究のモチベーションを奪われ、目標も見失いがちである。そんな時、この井尻の文章を味わってみるとよいと思う。次に一日の勉強計画および中・長期計画について井尻はこのようなアドバイスをしている。

- イ) どんな仕事でも、一つの仕事をやりあげる為には、最低10年の年月が必要。目先の仕事と将来の仕事を、バランスをとりながら、しかも並行して10年間続けていく(259・264頁)。
- ロ) 一日の勉強時間は、当面の研究、仕事のための勉強に割り、残りの時間を、一生をかけたテーマに関する基礎勉強にあてる。一年一年実績を出し、実績に応じて自分のテーマによる研究時間をたたくい取って行く(262~263頁)。
- ハ) 一度選んだテーマは、やたらに変えては必ず失敗する。遠いテーマや基礎の勉強計画の中には、必ず専攻分野の古典(単行本)を歴史的に、すくなくとも10冊くらい読破する予定を組んで

おくこと(264頁)。

- 二) 絶え間ない、規則正しい、系統的な作業(仕事)をすること(265頁)。
  - ホ) 一週間を単位にした規則正しい研究計画を作ること。決まった時間に、決まった勉強をする、という勉強の条件づけをする。一年も続けると、生理的に変えられなくなる(265~266頁)。
  - ヘ) 一番大切な勉強(または困難なテーマ)は一番時間がつぶれないところに配置すること。初等的なものは連日勉強できるように配置すること(266~267頁)。
- これらもいちいち納得できる教えである。特に、「絶え間ない、規則正しい、系統的な作業をすること」という教えは、雑事に心も体も奪われがちな在野研究者にとって、重要な指針となると思われる。毎年、少しずつでもいいから実績を残すことも重要である。知識を蓄積することだけに満足せず、そこから生まれた知見を少しずつでも発表することによって実力がつき、周囲(家族や職場)の理解も勝ち取れるのである。次に共同研究の運営について井尻は次のようなことを書いている(「II 科学運動の新しい方法」)。

- イ) 研究の方法や手段の大綱を統一しておくこと(94頁)。
- ロ) 各研究者に分担された問題(対象や材料)の要点は、その人の研究成果の報告を聞くだけでなく、全部の研究者が必ずモノに即して、観察しあい、考究しあい、かつ討論しあうことが大切である(95頁)。
- ハ) 納得すくで真のリーダーを選び出すこと。こうすることによって若い世代の持っている独創力と実行力が、年長者の総合的判断力や経験と巧みに融合する(96頁)。
- 二) 団体研究を行なうにあたって一番大切なことは、研究者の水準がそろっていることである。なかでもとくに重要なことは研究者の世界観(哲学や思想)と科学思想(理論や方法論)が一致していることである(96頁)。
- ホ) 老いと若さの矛盾は根本的な矛盾として残り、(中略)必ず若さの勝利に終わる。この若さを信じられず(中略)若い芽をそだてようとはしないで、これを押しつぶすような言動は、反省すべきだと思う(137頁)。(自戒したい: 大村)
- ヘ) 団体研究至上主義に走って、個人研究にブレーキをかけたり、一人一芸をさぼる態度を取ったりしない(203頁)。

在野研究者は研究仲間を持つことが大事である。研究仲間がいれば独善に陥ることを防ぎ、モチベーションを維持することも出来る。特に共同研究は、個人では実現出来ない大きな仕事が出来ると、ただし、共同研究のノウハウを持たないと、すぐ行き詰まる恐れがあるので、上記の教えを意識しながら活動を続けて行くことよいと思う。専攻は違いが是非一度お目にかかりたかった先学である。

\*巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

## 目次

■心に残る先学の人生記録 —読書日記から— (第29回)	大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第220回)	山本良太 …3
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む (第4回)	山本暉久 …2	■考古学者の書棚「縄文海進—海と陸の変遷と人々の適応—」	野内秀明 …4

## 考古学の履歴書

## 考古学とともに歩む(第4回)

山本 暉久

## 4. 大学での考古学 その1

前回触れたように、入学早々、はじめての発掘調査に参加することとなった。遺跡の発掘など経験したことがなかった私にとって、それは驚きの日々でもあった。当時の率直な感想といえば、発掘とは、なんと「体力」がいるものかということに尽きる。ひたすら円匙をふるい、一輪車に排土を積んで土捨場へと運ぶ連続で、高校時代の自分は、スポーツ嫌いの「帰宅部」であったから、疲れること激しく、早速全身がバキバキの筋肉痛となってしまった。当時の発掘は、初心者には、そうした経験をさせることが当たり前で、それに耐え抜かなければ、即、脱落ということになってしまうのである。円匙投げの連続、一輪車での土運びは、必ず駆けて土捨場を往復するのが当たり前のことであった。それと、発掘に使用する機材の呼び名など全く知らなかったから、やれ、「円匙(えんぴ)」を持ってこい!」などと言われ、「?」などとすぐに反応ができない。ようやく「円匙」とは大きいスコップのことかと理解するが、それもときどき「ディスク持ってこい!」など言われるのである。このほか、やれ「移植こて」「ポーステ」「箕」「かけや」などと発掘用具の名前が現場で飛び交うのである。一輪車も「ネコ(車)」と呼ぶのが普通で、これまた「?」となる。どうやら、一輪車を逆さに置くと、ネコの背中の中のだというのが語源らしいが、それもさだかではないらしい。測量用具も使ったことはないので、やれ「平板」「アリダード」(「馬のしっぽ」ともいう)、「スタッフ」(箱尺)など「持ってこい!」となる。その当時は、測量も平板測量が当たり前であったが、その習得や「レベル」や「トランシット」の操作方法も設置を含めて素早く対応しなければならなかった。断面図の作成などは、「水糸」を張って、レベルで水平をとるのが、これもまた難儀で、レベルがないときは精度など当てにはならないのだが、「クリノメーター」なる道具についている「水準」を用いて水平をとることもあった。もともと理数系は全く駄目で、はじめは「測量するぞ!」と聞いただけで怖じ気づいてしまったであったが、図面をとることも早速習得しなければならなかった。平板測量とは別に土層断面図などはセクションペーパーに縮図して描き写すのだが、一般的に1/20で作図することが多く、これもまた、方眼紙の1mmのマス目が実際の2cmを表すということを知って作図することがはじめは難儀であった。三角スケール(「三スケ」)などという便利な道具のあることも初めて知った。

こうして、驚きの連続で初めての発掘を体験したのであるが、それもなんとか直ぐに慣れて、順応することになった。八王子市中野遺跡の調査は、大学の授業の合間を縫って通う日々であったが、先輩たちは、民家を借りて泊まり込んでいた。参加2日目には泊まるようにと言われてとても嬉しかった。大学入学してから、発掘に参加したときは、私的に「考古学日誌 Archaeology Diary」と名づけた調査日誌を記していた。今、それをめくると、下手な字で発掘の日々が記されている。1965(昭和40)年4月29日(木)には、次のように記されて

いる。「昨日帰ろうと思った時、O先輩から泊まるようにとのことで嬉しかった。K学院大学の夕食・風呂の後、宿舎に全員集まって、Meeting、新米としては、良くわからなかったが、そのうち努力すればいいだろう。その後、ウイスキーを飲んで、もう一つの宿舎に先輩たちとゴロ寝した」とある。初めての泊まり発掘が本当に嬉しかったのである。その当時の発掘調査は、泊まり込みの合宿が当たり前であった。

この調査日誌をみると、大学1年の発掘は、夏休みに入って7月3日～12・18日、八王子市中野遺跡の第2次調査で、古墳時代・鬼高期の住居址の調査、7月20日～8月1日、国分寺市武蔵国分寺塔址調査、この発掘は考古学研究会での初めての発掘であった。続いて8月10日～16日にかけて静岡市登呂遺跡の調査、この調査は、平野五郎先輩の紹介で参加したもので、東名高速道路建設に伴う調査(第6次調査に相当する)で、望月薫弘さんをはじめとする著名な先生方が多く参加された調査団による調査であった。とくに、杉原荘介先生が、木製の櫓(やぐら)の上で、大形カメラを構えながら、写真の背景に調査者が入らないよう大声で「そこ!どけ!」などと注意している、その真下で、和島誠一先生が、見学者を呼び集めて優しく遺跡の解説をしている、その対照的な姿が印象深く今も記憶に残っている。登呂遺跡という著名な遺跡の調査に参加したことは貴重な体験ではあったが、実際は、夏の日照りで遺跡を覆う粘土質の土層はカチカチで掘るのも大変だったことや、畦畔(けいはん)や暗渠(あんきょ)などと呼ぶ水田遺構や水路、畦畔を土留めする矢板などの木製遺物の出土などがあったが、ともかく疲れたことの影響が強い現場であった。この登呂遺跡の調査参加を途中で切り上げて、次に向かったのは、平野五郎先輩が調査する、清水市石川遺跡B地点の調査で、8月17日～26日まで参加した。古墳時代前期の低地遺跡であった。この調査では、台風17号が直撃し、調査トレンチが水浸しとなってしまった。文字どおりトレンチが泥水のプールとなってしまい、一緒に参加していた大脇 潔くんが、果敢にもこのプールを泥だらけとなって泳いだことが痛烈な印象として残っている。かくして大学1年生の夏休みは、発掘に明け暮れた日々となった。人間の記憶とは面白いもので、調査成果がどのようなものであったのかというより、ちょっとしたエピソードがいつまでも記憶に残るようだ。

## 略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月～1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月～2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英弉記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月～2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。

## リレーエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 220

## 上谷遺跡 ～埼玉県坂戸市中小坂

山本 良太

坂戸市は埼玉県西部、関越自動車道や首都圏中央連絡自動車道など関東地方の交通を支える道路網の結節点に位置する人口約10万人の町である。

行政界では入間郡に属しており、市域の北側を流れる越辺川の対岸に比企郡を臨む群境の町である。地勢をみると、入間台地の北側にあたり、河川による開析を単位とした坂戸台地と毛呂台地の各支台が市域の大半を占めている。台地の縁辺部には越辺川や高麗川によって形成された沖積平野が広がっており、今なお水田地帯として人々の生活を支えている。平坦な台地と肥沃な沖積平野という恵まれた環境のため、市内には150か所以上の遺跡が存在しており、年間約20件の発掘調査が途切れることなく実施されている。

今回紹介する上谷遺跡は、坂戸台地北東部の大字中小坂に所在する。遺跡の北側には小規模河川である大谷川が東西に流れ、台地を開析しながら入間川へと注ぐ。上谷遺跡の周辺には金山遺跡、前林遺跡、大穴遺跡など複数の遺跡が途切れることなく存在し、中小坂遺跡群を形成している。

中小坂地区では、遺跡登録以前から地元の好事家によって多くの考古遺物が採集されており、旧家で保管されている個人蔵の資料も数多く存在する。発掘調査中に会った古老の証言で「子供の頃、畑や露頭で完形の土器を発掘しては川越にあった骨董品店に持ち込み、小遣い稼ぎをしていた。」という興味深いエピソードを耳にしたこともある。

上谷遺跡における本格的な発掘調査は、昭和44年に城西大学考古学研究会によって実施された縄文時代中期と古墳時代の竪穴建物計3棟の学術調査が嚆矢である。昭和50年には団地造成と小学校建設に伴い、大規模発掘調査が実施され、古墳時代の竪穴建物39棟が発見された。これは坂戸市における行政発掘調査黎明期に実施された本格的な大規模発掘調査でもあり、上谷遺跡は本市の発掘調査史を語る上でも重要な遺跡と言える。

上谷遺跡で確認されているもっとも古い人類の活動痕跡は旧石器時代にまでさかのぼり、遺構は検出されていないものの尖頭器などの石器が複数採集されている。縄文時代中期になると遺跡の西側を中心として集落域が形成され、遺構数が一つのピークを迎える。当該期の竪穴建物はこれまでに10棟発見されており、広場を中心に弧を描いた建物配置となっているものの環状集落を形成するまでには至っていない。いずれも勝坂式と加曾利E1式が主体である。上谷遺跡から大谷川を挟んで対岸にあたる左岸台地上にも集落が形成されていることから、周辺一帯が居住に



▲上谷遺跡周辺の様子

適した環境であった様子が窺える。その後、遺構は散発的となり、再び増加するのは5世紀後半の古墳時代後期を待つこととなる。遺跡北側の台地縁辺部を中心に大規模な集落域が形成され、7世紀末まで空白期をおくことなく集落が造営される。7世紀前半には、北側緩斜面に須恵器窯である西谷ツ窯が開窯する。1基単独での発見であり、須恵器生産は単発的であったとみられる。8世紀になると遺構数が急減しており、背景には律令国家の成立に伴う集落の解体と再編が、当地にも波及していたことが想定される。

私が初めてこの遺跡と向き合ったのは、上谷遺跡14区の発掘調査を担当した時である。市役所入庁1年目、平成28年冬のことであった。調査開始前日の降雪によって一面銀世界となった調査区を、重機で除雪しながら掘削した日の体験が今でも強く印象に残っている。

14区では、古墳時代中期後葉から終末期までの竪穴建物6棟と、大型土坑1基が発見された。7世紀後半の竪穴建物では、カマドや貯蔵穴付近から大量の土師器が出土し、当時の土器様相を考える上での良好な一括資料となった。

この調査において特筆すべき成果として大型土坑の発見が挙げられる。土坑は複数の円形土坑が連結したような形状を呈していた。土層は暗褐色土と灰黄褐色粘土が互層に堆積している状況であり、複数の土坑が切りあうように掘削され、掘りあがった土坑に、隣接掘削箇所から排土が投げ込まれていた様子が確認できた。今回調査区のある台地北側縁辺部には、概ね1mほど下層に良質な白色粘土層が広がっており、大型土坑はこの粘土の採掘を目的とした古墳時代後期の粘土採掘坑と考えられる。



▲上谷遺跡14区粘土採掘坑

この白色粘土は、粘土塊の状態で周辺の同時期竪穴建物内からも検出されており、集落周辺で採掘した粘土を使用した生業として、土師器製作が行われていた可能性も想定される。古墳時代の比企・入間地域では、土師器に赤彩を施す独自の土器文化圏が展開される。14区に隣接している5区では、竪穴建物内から赤色顔料塊を内包した土師器坏が出土しており、上谷遺跡が「土器づくりのムラ」であった可能性が高い。今回の粘土採掘坑は、上谷遺跡だけではなく周辺地域における土師器の生産と流通の実態をとらえる上でも重要な発見と言える。

## 参考文献：

- 坂戸市教育委員会 2010 「上谷遺跡」上谷遺跡発掘調査報告書2
- 坂戸市教育委員会 2012 「上谷遺跡4」上谷遺跡6区・7区発掘調査報告書
- 坂戸市教育委員会 2017 「埋文さかど年報」平成28年度発掘調査

※今回のマイ・フェイバレット・サイトは吉田智哉さんです。

## 考 古学者の書棚

## 「縄文海進 —海と陸の変遷と人々の適応—」

遠藤邦彦・小宮雪晴・野内秀明・野口真利江 著／富山房インターナショナル(2022) ————— 野内 秀明

## はじめに

大学を卒業後、横須賀市自然・人文博物館に採用されたが、地質部門に蟹江康光学芸員がいた。蟹江学芸員と神奈川県立博物館の松島義章先生は懇意で、当時、ふたりは三浦半島の沖積層の調査を精力的に続けていた。そのような中、横須賀市役所の新館工事で発見された沖積層の調査に同行させていただき、掘削されて露出した沖積層を前にして、その層序、包含されていた貝の生態、土壌サンプリングの方法などを直接教えていただいた。また、沖積低地に残された伝福寺裏遺跡の整理作業などでは貝化石だけではなく、珪藻・貝形虫・フシソバなど自然科学からの多面的な分析に協力していただいた。

これらの経験から、大学で指導を受けた岡本勇先生は「(縄文時代)の社会は、階級以前の社会であり、そこでは人間対人間の矛盾よりも、人間と自然との間の矛盾のほうがつねに主要なものであった」と述べたが、沖積層から得られる海水準と海域環境・植生環境変化などの分析結果は、自然環境の変遷と対応する時期の縄文文化を考える上で欠くことのできない重要な、そして具体的な要素と認識していくことになった。

## 三浦半島近傍の貝塚の特徴

三浦半島とその近傍に残された貝塚は、丘陵を開析する浅谷や緩斜面に廃棄された斜面貝塚が多い。また、同一遺跡で集落が存続した間に廃棄地点を変えていることから、複数の地点に貝塚が残され、往々にして時期の異なる貝層が重層しているという特徴がある。そのため、土器編年研究に適していることから、特に早期土器の編年整備に野島貝塚、夏島貝塚、茅山貝塚、吉井貝塚などが大きな役割を果たしてきた。

また一方で、ひとつの遺跡で異なる時期の貝層に包含されていた貝類・海棲哺乳類・魚類などの組成は各期の海産資源開発の様相を示すとともに海域環境の変化を考える上で多くの情報を提供する。本書では、自然科学をもとに沖積層の解析から提示された基盤地形と海域環境の変化、それに対応する時期の貝塚から得られる考古学的情報をもとに、縄文時代に起った大きな環境変化とそれに共生していった縄文人の社会と文化の変容を考える上でその活動の場としての自然を包括的に触れたいと考えた。

## 早期の貝塚とマガキ礁

東京湾湾口部とその近傍の貝塚から得られる情報から、特に縄文早期に貝塚を残した縄文人がどのように海洋資源を開発していったのかを考える上で、海進初期に出現した干潟へのマガキの進出、マガキ礁の形成と発達、そしてマガキ礁生態系の遷移は大きな意味を持っている。詳細は野口真利江が本書で述べているが、本文中に掲載した写真1～4・写真11などはマガキ礁の変遷を具体的に思い描くのに役立つと思う。

マガキ礁が形成された汽水域は河川の淡水域と沿岸の海水域にはさまれ、水域環境が変化に富んでいる。夏島貝塚・第1貝層は東京湾に残された貝塚の中で最も古い早期前葉・燃糸

文土器群の夏島式期に形成された貝層だが、その主要採取貝類はヤマトシジミからヤマトシジミ・マガキ、そしてマガキ・ハイガイなど干潟群集種と移行していったと考えられる。夏島貝塚人の貝類採取対象種の変化は、近接した地点の沖積層から示された海域環境変化と整合的な事象である。そして、マガキ礁の周縁海域には河川に侵入するボラ・スズキ・クロダイ・コチなど周縁魚の生活圏で、発達したマガキ礁にはマガキを捕食するイボニシなどが移住し、夏島貝塚人にとって豊かな海産資源開発の場を提供したことだろう。

早期初頭に東京内湾に位置する夏島貝塚周辺に干潟が形成されたことは、夏島貝塚に近接して東京海底谷に注ぐ古東京川の河口付近から北西に伸びる埋没谷が存在した地理的環境にあり、縄文海進の進行に伴って海水準が上昇し、この埋没谷に海水の浸入が始まり、早期初頭になって海水は谷壁こえ、夏島貝塚の周辺に広く浅海が出現したことを示している。

それに対して、東京外湾では平作川の沖積層下に存在する埋没谷に早期前葉に侵入した海水は水深の浅い海域に止まり、早期後葉になって谷壁をこえて谷奥まで海域を拡大した。湾奥部の浅海域には干潟が出現してマガキ礁が発達し、湾中央から湾口にかけては沿岸につながる水深の深い内湾となり、茅山貝塚や吉井貝塚が残されたように縄文人にとって良好な漁場を提供した。茅山貝塚と吉井貝塚を残した人々は海産資源を中心とした安定した食糧生産基盤を占有し、多彩な装身具などにみられるような精神文化を発達させた。そして、東海地方に分布する粕畑式土器が一定量出土するように、海路を通して他地域との生活交流の拠点のひとつとなっていったのだろう。

## さいごに

三浦半島では縄文前期後葉から中期中葉まで貝塚を残す遺跡は確認されていないが、中期後葉以降の貝塚はスガイに代表される小型巻貝を主体として、ある一定量の二枚貝で組成されるように変化する。これは、海進期の海食作用による岩礁海岸の形成など自然環境の変化と植物食を中心とした食生活上で貝類に対する需要の変化も考える必要があるのかもしれない。

水稲耕作を受容して、自然を大きく改変していった弥生時代以前の縄文時代の社会と文化を考える時に、殊に自然環境の変遷は欠かせない要素だろう。岡本勇先生が縄文時代の歴史を叙述する基本的な視点を「人間と自然との矛盾」と位置づけたが、「共生」という言葉を加え「人間と自然との矛盾と共生」として、現在、私たちが直面している環境問題も含めて、本書を通してあらためて自然と共生していった縄文時代の人びとの歴史を考えてもらいたい。

## アルカ通信 No.227

発行日 2022年8月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL:0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp